

農家の調査、国動かした

研究は面白くない
大学教員に聞く

①

札幌大学の西村直樹教授(61)は、十勝など道内各地の農業試験場で長年勤務し、北海道の農業・農村の現状分析や将来予測など数々の研究・調査を行ってきた。研究の面白さや中高生へのメッセージを聞いた。

(聞き手・安藤有紀)

—専門分野は。

農業経済学と農業経営学。農畜産物の生産、加工、流通、消費といった一連の経済活動を研究对象としている。今、世界では飢餓問題が発生し、ウクライナとロシアの問題で農産物価格の暴騰も起こっている。社会的な視点でも注目されている学問といえる。

—この道に入った経緯は。
中学3年の担任の先生が北大農学部出身で、理科の授業の合間に農家実習の話をしてくれたのが農業に興味を持ったきっかけ。高校入学時には農業関係の仕事に就きたいと考えていた。

歴史や経済など社会科学も好きだったので、大学では農業経済分野に進んだ。当時は農場経営もしくは行政マンになって農業政策をやりたいと思っていたが、道に就職し農業試験場で始めた研究でその面白さを知った。新開発技術の経済性評価と農業政策の経済性評価を、農村集落や北海道の人口減少問題の研究も行った。

—研究の魅力とは。

新しいことを解明できるのも面白いが、研究した結果が社会の役に立つことこそ大きな魅力。例えば空知管内南幌町の

テンサイ多畦(たけい)収穫機の導入試験。人手不足解消策として期待されるが、高額なため経済性の検証が必要という



公論とフードシステム論も担当する。人口減少が進む中、食・観光は北海道の活性化に向けて非常に重要な産業。今までの研究で得たことや農業の現場の声を学生たちに伝えながら、未来の担い手を育てていきたい。

—十勝の印象は。
十勝には3度赴任し、気候が良くとても住みやすいと感じた。生活や教育に必要なものがそろっており、公共施設も充実している。十勝の人はチャレンジ精神が旺盛。農家をはじめ地域全体がいろいろなことに挑戦しようという活気にあふれていると感じる。

—十勝の中高生へ一言。

小学校から高校までは、バネに例えると「縮む期間」。さまざまなことを学んで知識を蓄え、大学など専門教育を受ける場や社会に出てから一気に跳ね上がる。大きなジャンプをするためには、縮む期間がとても大切。

しかし、この期間に周囲の人に合わせて自分の意見を言わずにいることを覚え、型通りの知識・人間関係が身に付いてしまつと、その後も自分を表現できず縮んだままになってしまつ。跳ぶ力は持っているのに目標がなくジャンプできない。そうならないように、高校生までに自分は今何をしたいのか真剣に考え、目標を作ってほしい。

—大学での担当講義は。

農業経済論とゼミ。ゼミは「食農ゼミ」と名付け、卒業後に行政やJA職員、食品流通、製造業など食や農業に携わる人材を育成していく。今年度開講の「サツダイみらい志向プログラム」の3プログラムのうち、「食・観光」プログラムのグリーンツーリズム

札幌大学

西村直樹教授(61)



にしむら・なおき 1960年赤平市生まれ、酪農学園大卒。83年に道入庁、道立滝川畜産試験場を振り出しに中央、十勝、上川の名農業試験場で勤務。2018年道立総合研究機構農業研究本部十勝農業試験場場長、21年4月から現職。

(月1回掲載します)